

大楽毛物語

7



「北海紀門」による釧路村

鳥取士族の移住を受け入れた明治17、18年ころの釧路地方の状況はどんなだったのだろう。詳しく伝える記録はないというのだが、安場保和の「北海紀門」によると17年の釧路は戸数として米町・真砂町（現在の南大通）15.0戸、オダイト（入舟付近）40戸、知人20

戸、幣舞30戸、浦見4戸、茂尻矢（城山付近）1戸、橋北に至っては現在の釧路駅前北大通付近に3戸で、頓北（寿町付近）は3戸のみ。全部合わせてたったの25.0戸というのだから寒村もいといこゝろ、夜など遠くのそここゝにランプの灯りがうつすら赤く見えるだけだった。主な産業は、もちろん

海の幸水産。と言っても魚を獲る技術も船も満足でないものだから、磯舟で近海を漁る昆布漁業。漁師たちが釧路、桂恋、昆布森、跡永賀、仙鳳趾と海沿いの50くらゐの漁場に僅かな集落をつくっていただけである。その他の漁場としてニシンが9、サケが10ヶ統あるのみで、盛漁期になると函館方面から渡る出稼ぎ漁師が集まって、しばらくの間活気をみせるものの彼らが去ると再び貧寒とした漁村に戻るだけであつた。元気のいい越後衆が渡つてきて、川崎船によつて湾内での濶手線漁業を開くのは、まだ先のことである。

内陸農業は手つかずの頃

鳥取士族たちの期待するのは、何としても土と農業である。しかし漁業に對して内陸農業は全く手つかずの状況だつたのだ。士族受け入れが急と

なつて根室県令2人のにわか調査でも、阿寒川下流域の大楽毛地区がやや適地かと報告した（先月号）ものの、本当に農業に合つた良質地である保障はない。何と言つても一度も農作物らしきものを植えたことも収穫したこともないのだから。

何と言つても阿寒川西南

大正9年の大洪水まで阿寒川は現在の鳥取を横断していたのだが、根室県令の報告文は「阿寒川西南が地味膏沃、開墾容易であり、川沿いに戸数50戸、開墾地90万坪、勸業派出所、倉庫1棟の用地は十分確保出来、釧路とは沿岸街道より道路を一里20町を新設すれば村内（釧路に至る）などとされ、結局この一帯が移住地と決定した。調査した一人赤壁はのちに釧路支庁長となり、もう一人の酒井は釧路郡書記から鳥取戸長に就任した。

宿弥丸の船影を見て感激

さて、航海の途中、特別の計らいで函館港にも一泊した宿弥丸は、6月9日早朝釧路港に到着した。港には根室県庁から特派された日高敬介をはじめ、勸業派出所主任、御用係のほか釧路村の総代張江豊治（味噌醬油商）武富善吉（海産）、豊島庄作（海産・回船）、佐々木與兵衛（鉄物）、原田幸吉（海産・米穀）、中戸川平太郎ら当時の顔役が加わつて何かと世話を焼き午後3時ごろ、やつと全員の上陸を終えた。

宿弥丸の船影を見つけた出迎えの人々、彼らの表情がわかるまで近づいた鳥取の移住者たちの気持ちを思うとき、万感相迫るものだったと思われる。しかし6月初旬の釧路はまだ潮の香りがする冷気が漂っていた。

（つづく）

北海道新聞

購読お申し込みは
フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン
0120-464-104
または右記販売所へ

(有)丹葉新聞店
釧路市大楽毛5丁目8の1
TEL:57-8228